

発掘速報展（平城宮跡資料館）

「奈良の都を掘る－発掘速報展 平城 2002－」

2002年11月1日から21日まで、平城宮跡資料館で、上記の速報展を開催しました。2001年度に平城宮跡発掘調査部が実施した発掘調査の成果をまとめて紹介したものです。現地説明会の機会のなかった現場も多く、今回も好評のうちに終えることができました。展示からいくつか紹介します。

平城宮では、まず第一次大極殿院西楼（第337次）の調査では、赤色の彩色（ベンガラ）を残す「埋め木」が目をはきました。赤い柱は奈良の都を象徴するものともなっていますが、平城宮跡内で実際に赤塗りの柱材の実物が出土したのは意外にも今回が最初です。「小便禁止」看板などの木簡にも熱い目がそそがれました。木簡の現物展示は保存上、多くの困難をとまいます。今回も照度計を設置するなど、展示環境のデータの蓄積につとめました。平城宮では、ほかに、第二次朝集殿院南門（第326次）の位置を確認し、規模、造営工事の過程が判明したことを紹介しています。

平城京内では、宅地と寺院の調査が主になりました。長屋王邸の中枢部の調査（第329次）では、懸案であった建物規模を確定しました。寺院では、興

福寺関係の調査が主で興福寺中金堂では、創建時以来の度重なる火災と復興の様子を展示しました。一乗院（第330次）と大乘院（第336次）ではともに、園池の変遷をたどりました。明治以降、一乗院は裁判所に、大乘院は一時小学校の敷地になっています。今回は、こうした近代史に関わる出土遺物も展示しました。ノート代わりに使われた石盤^{せきばん}の前では、昔話に花を咲かせる姿がみられました。

（文化財情報発信専門官 千田剛道）

公開講演会

奈良文化財研究所 第91回公開講演会

毎年、春と秋の2回にわけておこなわれる恒例の公開講演会が、2002年11月16日、平城宮跡資料館講堂にて開催されました。通例、奈良文研に所属する研究員が交代で2名ずつ講演するのですが、今回は初めての試みとして、2名の研究員のほか、町田章所長が講演をおこないました。

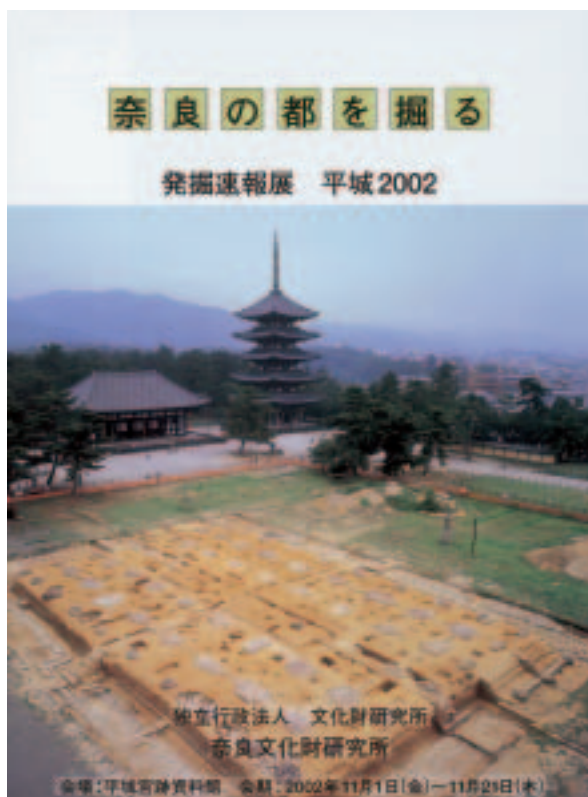
講演はまず、町田所長が「考古学用語のあれこれ」と題して、考古学で通常もちいられる各用語の実際について講演しました。「音読みと訓読み」「古い言葉」「言葉の意味と異なる用例」という設問について、用語のいわれや伝承の仕方、ニュアンスの違いなどを経験談や事例を交えてわかりやすく説明され、好評を博しました。

つづいて、平城宮跡発掘調査部の金田明大が「歴史空間を地理情報で視く」と題して、GIS（地理情報システム）と考古学分野での利用について講演しました。最近、脚光を浴びつつあるGISの原理を紹介するとともに、考古学への様々な利用について、実際に試みた成果を画面で表示しつつ、考え方や方法などを解説しました。

最後に、平城宮跡発掘調査部の平澤麻衣子が「巨大建造物は足元が肝心－平城宮第一次大極殿の基壇－」と題して、巨大建造物を下から支える基壇について、現在復原工事が進行中の第一次大極殿を題材に講演しました。基壇の外装や作り方について簡単にふれた後、第一次大極殿の基壇形態について、模型や実際の工事写真などを交えつつ、発掘遺構から基壇形態を復原する考察過程を説明しました。

今回、所長が講演したこともあり、会場が満員になるほどの盛況ぶりでした。

（平城宮跡発掘調査部 平澤麻衣子）



「奈良の都を掘る」リーフレット表紙